筑波学院大学紀要第14集　113 ～ 125 ページ　　2019年

＜研究ノート＞

神聖ローマ皇帝カール４世の自叙伝
―翻訳と註解（8）―

小松　　進*

The Autobiography Written by Holy Roman Emperor Charles Ⅳ
― Translation into Japanese and Commentaries（8）―

Susumu KOMATSU *

１．はじめに

父と子の反目と葛藤は、いつの世にも繰り返される。それは、父から子が自立するためのいわば通過儀礼のようなものであろう。ルクセンブルク家初代のチェコ国王ヨーハンとその嗣子カールの確執が、カール自身によって赤裸に表白されるのが、自叙伝第８章の後半である。

そもそも、ヨーハンとカールは、対照的と言ってもよい気質の持ち主であった。ヨーハンが戦場を馳駆して騎士的生活を貫いたのに対して、カールは自ら聖書釈義をするほど学問と思索を好んだ。しかし、こうした気質の違いにもまして、両者の亀裂を深刻なものにしたのは、チェコ王国における二人の境遇と政策の違いである。この父子の対立は、中世チェコ王国が抱える社会構造と国家体制の問題に深く根差していた。

２回に分けて訳出した自叙伝の第８章は、カールの半生譚の転換点をなす。まず、カールが父王とは異なる政策を模索し始めたことが記される。さらに、ルクセンブルク家、ヴィッテルスバッハ家、ハプスブルク家の家門勢力拡大政策における熾烈な角逐の始まりが綴られ、とりわけ、当初は同盟関係にあったルクセンブルク家とヴィッテルスバッハ家の敵対は、やがてルクセンブルク家によるカールのドイツ国王擁立に至る導火線となる。また、カールの活動範囲が拡がり、その叙述が東ヨーロッパの諸情勢をも射程に収めるようになる。

今回訳出するのは第８章の後半で、その梗概は、以下の通りである。

・カールのチェコ王国執政権剥奪
・怪異なものとの遭遇
・シロンスク（シュレージエン）のチェコ王国帰属
・チェコ国王とポーランド国王の和約
・チェコ国王とハンガリー国王の同盟
・ティロール伯領におけるカールの後見統

＊　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

治

チェコ民族伝来のプシェミスル王朝が絶頂期を迎えたのは、13世紀後半のことであった。ところが、その絶頂は、半世紀も経たぬ間に、突如、暗転する。1306年にプシェミスル王朝が断絶して異邦の諸家門が王位争奪を繰り広げ、チェコ王国の国家秩序が崩れ去ってしまったである。王位争奪戦に勝利を収めたのがルクセンブルク家だが、同家の初代チェコ国王ヨーハンとその嗣子カールは、崩壊した王国の秩序再構築という難問に直面する。そして、自叙伝に記されるこの父子の対立の根底には、こうした難問をめぐる両者の立場の違いがあった。本稿では自叙伝第８章の後半を訳出し、その叙述の背景を明らかにするため、13世紀にチェコ王国を繁栄へと導いた要因、プシェミスル王朝最晩期の隆盛と凋落、ヨーハンとカールが直面した問題、こうした点にも解説を加えたい。

２．自叙伝第8章後半（翻訳）※

（父王ヨーハンがチェコに帰国した）まさにそのとき、邪悪で虚言を弄する側近たちがわが父の傍らで幅を利かし、余に敵対するようになった。この者たちは、チェコ人であれ、ルクセンブルク伯領の出身であれ、何より先ず己が利益を優先させる連中であった。連中は、わが父に近づき耳打ちして仄めかしたものだ。「陛下、お気を付け召されよ。ご子息は王国内に多数の城をもち、陛下の御家来衆にもご子息に従う者が数多おります。されば、長きに亙りご子息がかような力を持ち続けるなら、望む時には、陛下を国から追い出してしまうことでしょう。それと申しますのも、ご子息は王国のご世継ぎでもあれば、チェコ王家の血筋を引いてもおり、チェコの民草から大層愛されておりますが、それに引き換え、陛下は余所者にすぎないからでございます」。ところで、連中がこんなことを吹き込んだのは、（余が取り返した）くだんの城と王室財産を父から託されるようにと、己が利益と地位を欲したからだ。しかるに、父自身も連中の言い分をもっともなことだと思い、とうとう余について疑惑を抱くようになった。そして、この疑惑ゆえに、父は余からすべての城を奪い去り、チェコとモラヴィア辺境伯領における執政権を剥奪した。かくして、余に残されたのは、モラヴィア辺境伯という名あって実なき肩書きだけになってしまった[1)]。

その頃のことである。とある日、モラヴィアにいたわが父の許に赴こうとして、余は馬でクシヴォクラートからプラハに向かい、かなり遅くなってプラハ城内の旧城伯邸へと乗り付けた。立派な王宮が完成するまでの数年間、その旧城伯邸に余は居を構えていたのである。その夜のことだ。余は寝床に横たわり、父親のブシェク・ズ・ヴェルハルチツが余の前の寝床で休んでいた。冬だったので、部屋では火が赤々と焚かれ、たくさんの蝋燭が灯されて煌々と部屋中を照らし、扉と窓はすべて閉じられていた。余がまどろみかけたその時だ。何やら得体の知れぬものが部屋の中をうろつき、余たちは目を覚ました。起きてそれが何かを、余はブシェクに調べさせた。ブシェクは起きて部屋中を探し回ったが、何も目にせず、何一つ見つけ出すことができなかった。それから、ブシェクはさらに火をおこし、もっと多くの蝋燭に灯をつけた。そして、椅子の上に並べられ葡萄酒をなみなみと注がれた杯のところへ行き、一杯飲んで明るく光る大きな蝋燭のそばにその杯を戻した。酒を飲むとブシェクは再び寝床に横になり、余は上掛けを身体に巻いて寝床に座り、何ものかがうろつくのを聴いていたが、何も目にすることができなかった。こんな格好で余とブシェクが杯と蝋燭の方を見やると、杯の一つが投げ飛ばされるのを見た。さ

らに、その杯は、何者の仕業か判らぬが、ブシェクの寝床の上を越えて部屋の一方の端から他方の端の壁に投げ飛ばされ、その壁に弾き返されて部屋の中央に落ちた。これを見て、余はひたすら恐れおののくばかりであった。絶えずうろつくものの物音が聞こえるのだが、何も見えないのだ。ともあれ、キリストの御名において聖なる十字を切り、あとは朝まで眠ることにした。朝、眼を醒ますと、杯は投げ飛ばされたまま、部屋の中央に見つけ出された。余はこの一件を、朝から伺候した家人たちに話して聞かせた。

その頃、わが父は、威風あたりを払う軍勢とともに余を、シロンスク（シュレージエン）にあるジェンビーツェの領主ボルコ侯[2]に差し向けた。この侯が、君主でもなければ、わが父とチェコ王国の封臣でもなかったからである[3]。ところで、わが父はヴロツワフ侯ヘンリク７世殿[4]から、すでにヴロツワフ市を手に入れていた。侯に世継ぎがいなかったからである。そして、ヘンリクは、一代に限って、クウォヅコ[5]の領地を贈られた。ヴロツワフ市とその侯領を自分の弟ボレスワフ[6]に手放すのではなく、永久にわが父とチェコ王国の王冠に帰属させることを望んだのである[7]。ヘンリクとその弟は互いに敵視し合っていたのだ。わが父がヴロツワフ市を手中に収めると、さらにシロンスクとオポーレの諸侯がことごとく、永久に父の支配とチェコ王国の王冠に服すことになった。チェコの諸王に保護と防御を託すためである。ただし、シロンスク諸侯のうち、シュヴィドニーツァの領主[8]とジェンビーツェの領主ボルコは例外であった。余が侵寇したのは、このボルコの領土に他ならない。その模様は年代記に録されているとおりである。その領土は劫略され、さしものボルコもやむなく交渉に応じ、他の諸侯のように、わが父とチェコ王国の王冠に服する封臣となるに至った[9]。

この遠征事業をやり遂げると、余はわが父のいたハンガリーへと道をとり、ドナウ河畔のヴィシェグラードで、国王カーロイ１世[10]の許にいる父と合流した。国王カーロイはかつてわが父の妹[11]を王妃に迎えたのだが、その王妃が長逝すると、クラクフの国王カジミェシュ[12]の姉[13]を娶り、その王妃との間に３人の息子を儲けていた。嫡男ラヨシュ[14]、次男アドラーシュ[15]、三男イシュトヴァーン[16]である。この国王カーロイは、その地で、わが父とクラクフの国王との間に、和約を成立させた[17]。わが父は、マウォポルスカ（小ポーランド）に有していた権利、すなわち、グニェズノとカリシュ、その他のマウォポルスカ諸地方に対する領有権を放棄し、一方、クラクフの国王は、わが父とチェコ王国に対して、シロンスク、オポーレの全諸侯領、ヴロツワフ市を自分とマウォポルスカの王位継承者のために請求するすべての権利について永久に放棄する、というのが和約の内容である。かねてより、この両者の間で争いが続いていたからである。そもそも、わが祖父のチェコ国王ヴァーツラフ２世は、マウォポルスカ国王にしてクラクフとサンドミェシュ侯であったプシェムイスウの一人娘を妻に迎えたために、クラクフ、サンドミェシュの侯領とともにマウォポルスカを獲得した。しかも、このプシェムイスウは、自分の死後、所有していた侯領と王国を永久に、祖父とチェコ王国の王冠に帰属させた[18]。しかし、くだんのカジミェシュはその相続娘の叔父だったことから[19]、女性には王位継承権がないと異を唱え、自分こそマウォポルスカの王位を継ぐ権利があると主張したのであった。かくして、チェコの諸王と、クラクフとマウォポルスカの諸王、つまり、カジミェシュとその亡父ヴワディスワフとの間に、長きに亙って戦争が続いた[20]。

この戦争も、ハンガリー国王の仲介で、上述のとおり和解を見た。ハンガリー国王は、

これを機会に、わが父と同盟を結び、ケルンテン公領をわが弟から奪い取ったオーストリア大公とくだんの（皇帝）ルートヴィヒに対抗して[21]、父に味方することを約した。かくて、この同盟には次の３人、すなわち、わが父、ハンガリー国王、わが姉を妻に迎えたニーダーバイエルン大公[22]が名を連ねることになった。同じ頃、わが父は余をティロール伯領に遣わし[23]、わが弟とその妻を後見してティロール伯領を治めさせることにした。弟夫妻がまだ若すぎたからだ[24]。そこで、余はその地に赴き、父に託されたとおりにこの任務に励むと、その統治はティロール伯領の民から受け入れられたのであった。

3．チェコ社会の大変動

13世紀後半におけるプシェミスル王朝隆盛の背景には、チェコ王国を根底から一新させた経済と社会の大変動があった。それはチェコ王国内だけの現象ではなく、ヨーロッパ全土の封建社会を揺り動かす変革の大きなうねりの一部であった。そのうねりはヨーロッパの先進地域で11世紀に端を発し、13世紀までにはチェコ王国を含むヨーロッパの周辺地域に達する。この大変革のうねりをひき起こしたのは、中世農業革命と大開墾運動の進展である。

中世農業革命は、18世紀半ばに始まる産業革命にも匹敵する大変革であった。鉄製農具の使用、わけても鉄製有輪重量犂の導入、牛や馬などを農作業に利用することを容易にする家畜繋駕法の改良、水車の普及、そして、畑作農業と家畜飼育を同時に営む混合農業において当時としてはもっとも合理的な農法であった三圃式農法の浸透。こうした技術革新こそ、中世農業革命の核心である。この技術革新によって、農業の生産力は飛躍的に向上し、人口は急増する。人口の急増は、耕地の拡大を促す。こうして始まるのが、大開墾運動である。

太初よりヨーロッパ大陸は鬱蒼とした森林におおわれ、中世初期まで人間の居住地域は樹海の中に浮かぶ孤島のようなものであった。ところが11世紀以降、ヨーロッパ全土をおおっていた森林は切り拓かれて農地と人間の居住空間に変わり、ヨーロッパの景観は大きく変貌する。

こうした耕地の拡大は農業生産力のさらなる増大を可能にし、余剰生産物を生み、食糧生産に直接携わらない非農業人口の扶養力をヨーロッパ社会は獲得する。そこで起こるのが、職業分化である。生産者によって消費され尽くされない余剰生産物は交換され、その交換を担う商人に活動の舞台を提供し、また、専門の技術を必要とする農機具などの生産を受け持つ手工業者が農民から分化する。そして、商工業における流通と生産の拠点として、ヨーロッパ各地に都市が叢生し、領主と農民からなる封建社会に、都市と市民という新興勢力が産声を上げる。

また、ローマ帝国末期より衰微していた遠隔地商業も活気を取り戻す。ヨーロッパ大陸の南には主に奢侈品が取引きされる地中海商業圏が、大陸の北には主に生活必需品が取引きされる北海・バルト海商業圏が形成され、大陸内部には、たとえばシャンパーニュの大市などが立つ内陸商業圏が南北二つの商業圏の商品を仲介した。こうした商業圏を物資と商人が行き交い、人口１万にも満たぬ都市が雨後の筍のように姿を現わし、ヨーロッパ全土を都市のネットワークがおおうようになった。

古代末期以来長きに亙った停滞の眠りから、こうしてヨーロッパ経済は逞しく覚醒した。景気の変動はあるものの、ヨーロッパ経済は現在に至る持続的成長の軌道に向けてまさに離陸したのである。

ヨーロッパ封建社会を激震させた地殻変動の波がチェコ王国に押し寄せるのは、12世紀

に入ってからである。そして、プシェミスル王朝が栄光の絶頂をきわめる13世紀に、それは本格化する。ヨーロッパの先進地域で先行した農業革命と大開墾運動は、１世紀あまり遅れて、周辺地域に位置するチェコ王国にも達し、同じような経済と社会の大変動をもたらした。しかし、チェコ王国における大変動は、次の点で、他の地域とは異なる様相を呈した。まず、それがドイツ人の東方植民と並行して進行し、この植民によって大いに促進されたという点である。さらにまた、この時代に、鉱山の開発が進み、わけてもヨーロッパ最大級の銀鉱脈が発見され、その採掘事業がチェコ経済の躍進に突出した役割を果たしたという点である。

チェコ王国は四周を森林と山地に囲まれ、その険しい山林が、北はドイツとポーランド、南はオーストリアとハンガリーから、国土を分かつ自然の国境を形づくっている。長らくこれら森林や山地は、人里離れた未開の辺地にすぎなかったが、12世紀に人口が増加すると、王国の住民はその手つかずの原野に分け入り、開墾を進め、入植していった[25)]。それが、チェコにおける大開墾運動の始まりである。しかし、チェコの四囲を取り巻く大森林をもっと大規模に組織的に切り拓いて、そこへの入植活動を展開したのは、ドイツから流入した農民たちであった。人口過密になった生地を捨て、怒涛のようにドイツ農民が押し寄せるのは13世紀で、その大量流入を企図し主導したのは、チェコ王国の修道院、貴族、そして王権であった[26)]。自らの所領の拡大と労働力の確保を目論み、王国の指導者層は、植民請負人（locator）に委託して、農地の永代保有など有利な経営条件に引き寄せられたドイツ農民を組織的に誘致した[27)]。こうして、チェコ周辺の山野は開拓され、ドイツ人の入植した村々で埋め尽くされたのである。

未開地の開墾にもまして、ドイツ人が重要な役割を演じたのは都市の建設においてであった。都市の創設やその整備に必要な経験と財力を、ドイツ人が持っていたからである[28)]。

チェコ王国で、農村地帯とは異なる独自な都市法をそなえた市民組織が出現するのは、大開墾の飛躍的な進展と同じく、13世紀においてであった。その都市法も、ドイツやオーストリアの諸都市の都市法に起源をもつ[29)]。貴族や修道院、わけても王権は、その支配の拠点やその周囲に都市を建設し、さまざまな特権をそれに賦与した。たとえば、市場開設の独占、周囲のある一定範囲で商工業の営業を許さない禁制区域の設定、城壁の建設などの特権である。特権を与えられた都市の中でもとりわけ目覚ましく発展を遂げたのは、王権の庇護と監督を受けた諸都市で、それら王権直属都市は貴族勢力と対抗すると同時に、王権を支える有力な財源の一つになった。チェコにおける都市共同体の形成を主導したことで、市内の指導者階層をドイツ人が形作った。彼らはもともと遠隔地商業に携わる商人や金融業者であったが、やがて市内に隠然たる勢力を振るう都市門閥として市政を牛耳った。大方がチェコ人からなる手工業者たちは、当初はこの都市門閥の支配に服したが、13世紀末なると、互いに連携して都市内共同体である同職組合は結成し、いずれは、ドイツ人の都市門閥と対抗するようになる[30)]。

13世紀にチェコ王国に簇生した都市で、もっとも繁栄したのは鉱山都市であった。チェコは銀鉱床が豊富で、13世紀前半にイフラヴァで、世紀後半にクトナー・ホラで銀鉱脈が発見された。わけてもクトナー・ホラの銀山は、ヨーロッパにおける銀の全産出量の三分の一にのぼる銀を産み、ゴールドラッシュならぬシルバーラッシュに沸き立ち、それとともに出現した新興のクトナー・ホラ市は、プラハに次ぐ王国第二の都市として繁栄

を極めた。こうした銀山の採掘にも先進技術をもつドイツ人鉱夫が招致され[31)]、彼らが造った鉱夫たちの集落が鉱山都市に発展するのである。王国の宝ともいうべき鉱山都市は王権の直轄支配下に置かれ、そこで産み出される銀こそ、最晩期のプシェミスル王朝を隆盛へと導く最大の資金源となる。そして、1300年、クトナー･ホラの豊富な銀をもとに、国王ヴァーツラフ２世は、グロシェン銀貨を鋳造させる。この銀貨は、チェコ王国内はもとより、信頼に値する通貨として広く外国にも流通し、チェコ王権の威信を高めた。グロシェン銀貨こそ、チェコ経済躍進の証しであり、プシェミスル王朝隆盛の象徴ともなった。

13世紀に頂点を迎えるチェコ経済の大変動は、中世チェコ王国の社会や国家構造を大きく変質させた。まず、経済の躍進がドイツ人の東方植民と深く結びついたことにより、チェコ王国はチェコ人とドイツ人が混住する民族複合国家となった。両民族の共存は、時として、両民族間の軋轢を生む。都市内部における都市門閥と同職組合に組織された手工業者の社会的対立は、二つの民族間の抗争という様相を呈した。また、プラハの宮廷を舞台とした政治的指導権をめぐる闘争も、両民族間の対立によって増幅された。こうした両民族間の緊張は数世紀にわたって続き、20世紀には第二次世界大戦を引き起こす導火線の一つとなる。ドイツ人の東方植民はチェコのみならず広く東ヨーロッパ全域で展開され、この歴史が、東ヨーロッパにドイツ人の生存圏を獲得するというナチス・ドイツの膨張政策の背景となった。その膨張政策は、東ヨーロッパに拡散したドイツ人を一つの国家に統合するという大ドイツ民族主義の主張を生み、こうした主張の最初の犠牲になったのがチェコのズデーテン地方である。ズデーテン地方はチェコ周辺の山林地帯に位置し、13世紀以来ドイツ農民が多数入植した土地であった。この地方のドイツ人を保護するという名目で行なわれたのが、ナチス・ドイツによる1938年のズデーテン併合である。ミュンヘン会談でヨーロッパ列強がこれを黙認したことで、ナチス・ドイツの東ヨーロッパ侵攻は加速され、1939年に、チェコスロヴァキア解体、ポーランド侵攻へと突き進み、ヨーロッパ全土を、そして、全世界を第二次世界大戦の大惨禍に巻き込んでいく。このように、13世紀に生じたチェコ王国内の民族対立は中世のチェコ社会を変えたばかりでなく、20世紀のヨーロッパにも大きな禍根を残すことになる。

チェコ経済の大変動は、チェコ王国の国家構造にも大変革をもたらした。その大変革の最たるものが、大所領を集積した世襲貴族層の出現と国家体制におけるその影響力拡大である。プシェミスル家による国家形成当初、チェコでは西ヨーロッパのような封建制度が発達しなかった。つまり、主君から封として世襲地を授けられる代わりに、軍事奉仕などの義務を負う封建領主が存在しなかったのである。チェコにも国家の要職を担う有力者層がいたが、その階層も本来は君主に忠節を尽くす従士で、世襲地を所有しているわけではなく、職務遂行の見返りに国家から報酬を給付される勤務貴族にすぎなかった。しかも、与えられた地位は世襲ではなく、それを獲得し維持できるかどうかは、君主の信任次第であった。10世紀末にプシェミスル家がチェコ国家の支配を確立して以降、その支配の拠点としてチェコ全土に城砦が築かれ、住民はいずれかの城砦の管轄下に置かれた。住民から取り立てられた諸賦課租は城砦に集められ、君主の宮廷は各地に点在する城砦を転々としながら、チェコ全土を支配したのである。こうした城砦を中心とする統治がプシェミスル家支配下の国家体制の根幹であり、その要をなす城砦の統轄者には従士出身の有力者が任命されたが、その地位に長らく留まることは

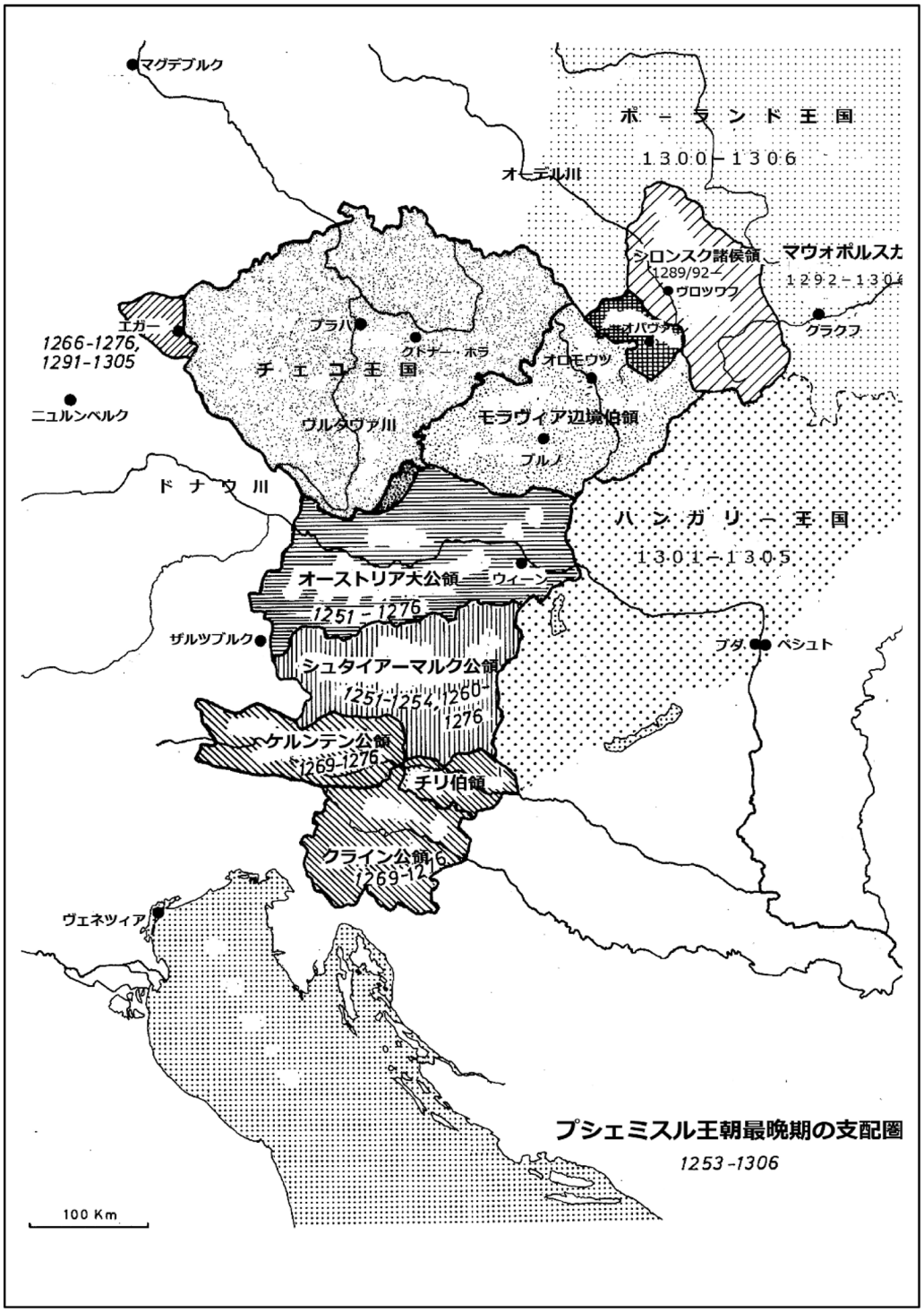
避けられた。任命された統括者が託された城砦周辺にあまりにも大きな影響力を持つのを阻止するためである。このように、12世紀まで、チェコ国家では世襲の所領を持つ貴族階層は形成されなかった[32)]。ところが、チェコ経済の大変動とともに、事態は一変する。大開墾運動が、貴族と国家体制のあり方を変質させたのである。君主に奉仕する勤務貴族は、自ら山林を切り拓いて大規模な開墾を推し進め、プシェミスル家の直接的な支配の及ばない所領を築き上げていった[33)]。12世紀後半になると、世襲の私有地を集積した新しい貴族階層が出現する。君主権力に従属する勤務貴族とは違い、自らの所領を持つ世襲貴族階層が形成されたのである。13世紀にチェコ国家が王国に昇格すると、これら新しい貴族階層は王権に対抗できるだけの実力を蓄えていき、国政の上にも重要な役割を演じるようになる。そして、ひとたび王権が弱体化すると、新興の貴族階層はプシェミスル家による王国統治の要である城砦をも掌中に収め、強力な王権を中心とする国家体制を大きく変貌させることになった。

４．最晩期プシェミスル王朝の隆盛と凋落

神聖ローマ皇帝フリードリヒ２世が1212年に発布した「シチーリャの金印勅書」によって、チェコ国家は世襲王国への昇格が正式に認められた。皇帝に臣従する帝国内の領邦でありながら、内政干渉を受けない半ば独立の王国という特異な地位を獲得したのである。経済的繁栄への途上にあったこの王国が中・東欧に雄飛しそこに覇権を打ち立てるのは、13世紀の後半、プシェミスル王朝の最晩期のことであった。時あたかも帝国は実質的に国王不在の大空位時代（1256～1273年）に突入し、その政治的空白がチェコ王国の勢力伸長に絶好の機会を提供した。この時代に、プシェミスル王朝隆盛の立役者になったのが、プシェミスル・オタカル２世とヴァーツラフ２世である。

プシェミスル・オタカル２世（在位1253～1278年）は、勇猛さゆえに＜鋼鉄の王＞とも、財力の豊かさゆえに＜黄金の王＞とも綽名され[34)]、チェコ王国を強盛へと導き、中央ヨーロッパに覇を唱えた稀代の野心家として歴史にその名をとどめている。この野心家に覇者への扉を開いたのは、オーストリア大公領におけるバーベンベルク家の断絶であった。それはアルプス地方に権力の空白状況を作り出した。この空白地帯へ周辺諸勢力が進出をもくろむ中、オーストリアの貴族たちにより大公に迎えられたのがいまだ国王即位前のオタカルであった（1251年）。大公位を争ったハンガリー国王はこの継承に反発し、バーベンベルク家の遺領の一つだったシュタイアーマルク公領を軍事力で制圧したが、公領の貴族たちの支持を得たオタカルは、ハンガリー軍を撃破してこの公領をも手に入れた（1260年）。これで勢いを得たオタカルは、さらに従兄弟からケルンテン公領とクライン公領を相続し、アドリア海沿岸にまで勢力を拡大する（1269年）。オタカルの目は北方にも向けられ、バルト海からアドリア海に至る地域に大勢力圏を築くという壮大な野望を抱いたが、リトアニア人などの異教徒に対する遠征は実りを結ばず、バルト海沿岸の都市ケーニヒスベルク（現在のロシア領カリーニングラード）の創建者としてその野望の痕跡を残すのみである。

チェコ王国の対外膨張政策を推し進めたばかりではなく、オタカルは成長著しい国内経済のさらなる躍進を力強く後押した。とりわけドイツ人の東方植民を奨励し、後世の歴史家がドイツ人の優遇によりチェコ国家の発展をゆがめたと評するほど[35)]、ドイツ人による森林の大開墾と都市の建設を熱心に支援した。都市こそ財力で王権を支えるもっとも強力な支柱となり、オタカルは都市建設をもっ



Jörg K.Hoensch, Geschichte Böhmens, München, 1987, S.91の地図をもとに作成

て当時実力を蓄えつつあった貴族階層に対抗する有力な手段としたのである[36)]。王権強化に関して、オタカルは強権の発動も辞さなかった。王国統治の要である城砦を各地に建設する一方で、本来国王の所有に帰するはずがいつの間にか貴族階層に私物化されつつあった城砦を容赦なく接収した[37)]。こうした強権政治が、王権と貴族階層との間に深い亀裂を生んだことは言うまでもない。そしてこの亀裂がオタカル没落の一因になった。

チェコ王国内で貴族階層と対立する一方、帝国内でもあまりに強大になりすぎたオタカルに諸侯たちが敵意を抱くようになった。その敵意が、1273年の国王選挙で噴出する。

オタカルを無視して行われた選挙で、ハプスブルク家のルードルフ１世（在位1273～1291年）が新しい国王に選ばれたのである。このルードルフの国王選出をもって、ドイツ国内に国王が不在の大空位時代は終わる。ライン川上流の弱小領主にすぎなかったルードルフは、老練なオタカルを出し抜くほど有能であり、かつ、老獪であった。国王不在の間隙をぬって行われたオタカルの勢力拡大には重大な不備があった。オタカルが手に入れた諸領邦は帝国の封土であり、その獲得には国王による授封という手続きが必要であった。ルードルフはこの手続き上の不備を突いた。国王の承諾を得ぬまま手に入れた領地すべての返還をオタカルに要求したのである。オタカルがこの要求を拒否すると、ルードルフはオタカルを帝国追放に処した。チェコ貴族の反乱で足元をすくわれたオタカルは一旦譲歩を余儀なくされたが、1278年、チェコ王国の総力を結集できぬまま、ルードルフに決戦を挑んだ。オーストリアのマルヒフェルトで、帝国諸侯とハンガリー国王の支援を受けたルードルフの大軍の前にオタカルは敗北を喫し、あえなく戦場の露と消える。

オタカルの敗死は、チェコ王国を存亡の危機に陥れた。嗣子ヴァーツラフ２世（在位1278～1305年）はいまだ幼弱ゆえに国外に連れ去られて、ブランデンブルク辺境伯の後見下に置かれた。国王不在という異常事態の中で、王権に楯突いた貴族たちは王室財産を強奪し、互いに党派を作って権力闘争を繰り広げた。チェコへの帰国を許されてヴァーツラフが王国再建の難事業に取り組むのは1283年からのことで、この若き国王はその難局を巧みに乗り切り、父王オタカルにもましてチェコ王国を繁栄へと導くことに成功する。

父王の轍を踏まず、ヴァーツラフは貴族階層と対立することを避けた。国王不在中に私物化された王室財産の返還をあえて求めず、国王に奉仕する従士たちの集会から発展した議会を尊重し、王権に対抗しうる実力を備えた貴族階層を議会に集めて国家運営に参加させた[38)]。

王国に安定を取り戻すと、ヴァーツラフはオタカルと同じようにチェコ王権の支配圏拡大に邁進する。ヨーロッパのどの国にもない強力な切り札が、ヴァーツラフにはあった。クトナー・ホラの銀山である。ヨーロッパ最大の産出量を誇るこの銀鉱床は、当時無尽蔵とも噂された潤沢な資金をヴァーツラフに提供した。先述したように、その銀をもとに、1300年、ヴァーツラフはグロシェン銀貨を鋳造させたが、この銀貨は国際通貨として広く流通し、チェコ王権の威信を高めた。チェコ国外に向かっての勢力拡大にも、惜しみなくこの銀が投入される。南進政策をとったオタカルとは違い、ヴァーツラフはチェコ王国の北方に進出の鋒先を向けた。南のオーストリアにハプスブルク家が家門勢力の拠点を移し、南進すれば強大になったこのハプスブルク家と衝突するからである。北のポーランド王国では12世紀以来ピャスト王家が分裂し、多数の諸侯が各地に割拠していた。1289年にまずシロンスク（シュレージエン）の諸侯が庇護を求めてヴァーツラフに臣従し、続いてマウォポルスカが服し、1296年にヴェルコポ

ルスカの国王プシェムイスウ２世が暗殺されると、ヴァーツラフはその相続娘エルジュビェータと結婚し、1300年、ポーランド王国の王冠を手に入れた。さらに、ハンガリー王国で1301年にアールパード王朝が断絶すると、嗣子ヴァーツラフ３世（在位1305～1306年）のためにこの王国の王位をも相続した。こうして、束の間ではあるが、チェコ、ポーランド、ハンガリーの３国をプシェミスル家の国王が同時に支配するという史上空前の事態が生じた。これを可能にしたのはポーランドとハンガリーの貴族たちがヴァーツラフを支持したからであり、この支持を得るためにチェコ王国で産出される莫大な銀が利用された。

こうした栄光の絶頂にある最中に、ヴァーツラフ２世が34歳という若さで突如病死する（1305年）。その嗣子ヴァーツラフ３世も、父王の偉業を継ぐに足る能力を発揮する暇もなく暗殺され、プシェミスル王朝は断絶した（1306年）。チェコ王国はオタカル敗死後と同じく、再び国家解体の危機にさらされることになった。

５．初期ルクセンブルク王朝が直面した諸問題

プシェミスル王朝の突然の断絶は、かつて経験したことのない未曾有の危機をチェコ王国にもたらした。国王不在ならぬ王家不在という危機である。民族伝来のプシェミスル家によって400年余り受け継がれてきた支配者の座が、あまりにもあっけなく空位となった。この空位となった玉座をめぐり、国外の諸勢力が５年余り熾烈な争奪戦を展開する。ケルンテン公ハインリヒ、ハプスブルク家のルードルフ、そしてまたケルンテン公ハインリヒと、周辺諸勢力によって玉座がたらい回しにされ、最後に、亡きヴァーツラフ２世の娘エリシュカと結婚したルクセンブルク家のヨーハン（在位1310～1346年）が、王位争奪戦の勝者となった。ドイツ国王で父王のハインリヒ７世の後押しが、ヨーハンの勝利を決定的にした。こうした王権の不安定さは、王国解体に拍車をかけた。王国の行政機構は機能せず、貴族階層による王室財産の横奪は留まるところを知らず、治安は乱れに乱れ、民衆の困窮は極まった。

王位獲得に成功したものの、ヨーハンの前には難問が立ちはだかった。まず、地に堕ちた王権の再建という難問である。ところが、国王就位の時点で、ヨーハンは重大な制約を受けることになった。就位協定[39]で、ヨーハンは、国王選出権や既得財産の所有権など、さまざまな特権を貴族たちに認めることを余儀なくされた。わけても、王国の要職に異邦人を任ずるのを禁ずるという協定内容は、ヨーハンと貴族階層との間に深刻な対立を生むことになる。遠くルクセンブルクから入国したヨーハンにとって、同伴した側近や顧問は、王国統治に不可欠な存在だった。しかも、ヨーハンはチェコ語を解せず、王国の伝統やしきたりに馴染むこともなかった。異邦人の起用をやめずチェコ王国に溶け込もうともしないヨーハンを、貴族階層は余所者と敵視し、1315年、公然と叛旗を翻した。両者の激突は貴族側の勝利に終わり、1318年、貴族たちの王権に対する忠誠と引き換えに、ヨーハンは国外から連れて来た政治顧問団の解任に同意した。これ以降、ヨーハンはチェコ王国統治への情熱を失い、ルクセンブルク家の勢力拡大のため、ヨーロッパ全土を東奔西走する放浪生活に身を投じることになる。

ヨーハンが解決しなければならない問題がもう一つあった。義父ヴァーツラフ２世が獲得したポーランドとハンガリーにおける王位相続権の問題である。ヨーハンはハンガリーの王位を断念したが、ポーランドの王位には執着した。ポーランドではピャスト家のヴワディスワフ１世が多数の諸侯領に分裂してい

た王国を統一し、1320年、その玉座に坐した。ヨーハンはヴワディスワフの王権を認めず、この国王とその後継者カジミェシュ３世と長らく争い、同じくヴワディスワフの王権を認めなかったシロンスクの諸侯たちを武力と調略で臣従させ、この地方をチェコ王冠に帰属させることに成功した。こうした王位継承権をめぐる争いが決着したのは1335年のことで、本稿で訳出した自叙伝第８章に記されるとおり、ヨーハンがポーランド王位への請求権を放棄する代わりに、カジミェシュはシロンスクに対するチェコ王国の宗主権を承認した。

外交で一定の成果を上げたものの、ヨーハンはチェコ王国における王権の再建には失敗した。この事業はその嗣子カールに引き継がれることになる。カールがチェコ王国で王権再建の事業に着手するのは1333年で、それは父王による家門勢力拡大政策の道具でしかなかったカールが父王から自立する最初の一歩でもあった。ヨーハンが企てた無謀なイタリア遠征（1331～1333年）から離脱し、10年ぶりにチェコに帰郷する決断したところからカールの自立は始まる。自らがイタリア遠征から離脱した理由を、戦費が底を尽き、戦争を継続しても名誉を保つのは不可能と判断したからと、自叙伝でカールは説明している。しかし、カールのイタリア退去は、国王不在中のチェコ王国における政治的・社会的無秩序を憂えたチェコからの使節団の強い要請でもあったらしい[40)]。

カールには、ヴァーツラフ２世の娘であった母エリシュカを介して、プシェミスル王家の血筋を引くチェコ国家の正統な王位継承者であるという強い自負があった。余所者として敵視された父王の轍を踏まず、カールはチェコ語の習熟に努め、要職にはチェコ人を配した。王権再建の手始めとしてカールがまず行なったのは、国王の権威の象徴としてプラハの王城を再建することであった。続いて、父王がなしえなかった事業に、カールは着手する。国王不在中に横奪され、あるいは抵当に入れられた城砦や王室財産の回収である。これは、プシェミスル王朝の城砦を中心とする支配体制の再構築を意味した。しかし、この政策を貴族階層が許容するはずがなかった。

ヨーハンは、当初、チェコ王国におけるカールの代理統治を容認したらしい。カールをモラヴィア辺境伯に任じ、国王名代として王国を統治する資格を付与したからである。だが、ヨーハンはカールに強い猜疑心を抱いていた。自分に敵対する勢力がプシェミスル家の血筋を引くカールを担ぎ出し、やがて自分を玉座から追い落とすのではないかという猜疑心である。それを懼れたヨーハンは、かつて３才のカールをプラハ郊外の城に幽閉し、さらに、王国から遠ざけるために７歳のカールをパリの宮廷に送り込んだ。カールの王権再建策に反発する貴族たちは、ヨーハンのこうした猜疑心につけ込んだ。チェコ王国にとって余所者にすぎないという負い目を持つヨーハンは、貴族たちの讒言に惑わされ、カールから王国の執政権を剥奪してしまう。

自叙伝に描き出されるヨーハンとカールの確執の背景には、このようにチェコ王国が直面した国家体制の危機があった。この危機は、王権と貴族階層の軋轢、チェコ民族とドイツ民族の不協和という火種が複雑に絡み合って醸成された。これら火種は、13世紀に顕著になったチェコ社会の大変動の中に胚胎し、いずれは燃えさかる埋火のようにその後長らくチェコ国家の歴史の底流でくすぶり続けるであろう。

註

※　翻訳に際して底本としたのは、従来どおり、E. Hillenbrand, Vita Caroli quarti―Die Autobiographie Karls IV., Stuttgart, 1979. である。なお、今回は地名の表記や位置に関

し、チェコ語訳の、J. Pavel, Karel IV. Vlastní Životopis, Praha, 1978.、英語訳の、P.W. Knoll, F. Schaer, Autobiography of Emperor Charles IV and his Legend of St.Wenceskas, New York, 2001.、フランス語訳の、P.Monnet, J.-C. Schmitt, Vie de Charles IV de Luxembourg, Paris, 2010.、を参考にした。

1）1335年夏。
2）ボルコ２世（1298/1301～1341）。
3）1327年から1331年にかけて、シロンスクの17諸侯がヨーハンを主君と認め、チェコ王国に臣従した。1335年８月24日にトレンチンで行われたヨーハンとポーランド国王カジミェシュの予備交渉で、ヨーハンはポーランド王位への請求権を放棄し、カジミェシュはシロンスクにおけるチェコ国王の宗主権を承認した。この協定に従わずヨーハンへの臣従を拒んだのが、ジェンビーツェ侯とシュヴィドニーツァ侯であった。カールによるボルコ討伐遠征が始まったのが、1335年９月である。
4）ヘンリク６世（1294～1335年）。ヘンリク７世とあるのは、カールの間違いである。
5）1097年以来、チェコ王国領。
6）ボレスワフ３世（1291～1352年）。
7）ヘンリク６世がヴロツワフ領をチェコ王国に寄贈したのは、1327年のことである。
8）ボレスラフ２世（1312～1368年）。
9）ジェンビーツェ侯ボルコが、チェコ国王に帰順したのは、1336年８月。
10）ローベルト・カーロイ１世（在位1308～1342年）。ハンガリー王国におけるアンジュウ王朝初代の国王。
11）ベアートリクス（1305～1319年）。1318年に、カーロイ１世に嫁いだが、翌19年に早世した。
12）カジミェシュ ３世(在位1,333～1370年)。ポーランド王国のピアスト王朝最後の国王で、大王と称せられる。
13）エルジュビェータ（1305～1380年）。1319年、カーロイ１世に王妃として迎えられた。
14）のちのハンガリー国王ラヨシュ １世（大王）（在位1342～1382年）。
15）アンドラーシュ（1327～1345年）。
16）イシュトヴァーン（1332～1354年）。
17）チェコ国王、ポーランド国王、ハンガリー国王が集ったヴィシェグラード会議は、1335年11月に開催され、３）のトレンチン合意を概ね確認し合った。
18）カールの説明は正確ではない。チェコ国王ヴァーツラフ２世（在位1278～1305年）はカールの母方の祖父で、シロンスク侯ヘンリク４世（在位1288～1290年）と相続契約を交わし、1290年、ヘンリクが没すると、ポーランド南部のマウォポルスカ（小ポーランド）とシロンスクの王位を請求した。さらに、ポーランド北部のヴェルコポルスカ（大ポーランド）国王プシェムイスウ２世（在位1290～1296年）が弑されると、1296年、その王位の継承をも主張し、1300年、グニェズノでポーランド国王に戴冠された。その王位を確固とするために、ヴァーツラフは、1302年、プシェムイスウの一人娘エルジュビエータ（1288～1335年）を妻に迎えた。
19）カジミェシュをエルジュビェータの叔父とするカールの記述は間違いである。カジミェシュの母が、エルジュビェータの父プシェムイスウ２世の従姉妹にあたる。
20）ヴァーツラフ２世の没後、その嗣子ヴァーツラフ３世（在位1305～1306年）がチェコ王国とポーランド王国の王位を継承したが、ポーランドではクヤーヴィ侯ヴワディスワフ１世（在位1320～1333年）がそのポーランド王位継承を認めず、両者の争いが始まった。1306年にヴァーツラフ３世が暗殺されると、ヴワディスワフがクラクフ司教によってポーランド王国の継承者と宣せられたが、実際にヴワディスワフが長きに亙る戦いの末にクラクフの国王に戴冠されたのは1320年のことである。このヴワディスワフの王位を1333年に引き継いだのが、その嗣子カジミェシュ ３世で

あった。カールの父のルクセンブルク伯ヨーハンはヴァーツラフ２世の娘エリシュカと結婚することでチェコ王国の王位を手に入れたが（1310年）、同時に義父のポーランドにおける諸権利をも継承し、その相続権をめぐって、ヴワディスワフ、カジミェシュ父子と敵対した。この抗争に終止符を打ったのが、1335年のヴィシェグラードの和約である。

21）この経緯にはついては、自叙伝第８章前半参照。皇帝ルートヴィヒ４世（在位1314～1347年）が、オーストリア大公にケルンテン公領を授封したのは、1335年５月。

22）ハインリヒ２世（在位1334～1339年）。1328年にカールの姉マレガレータ（1313～1341年）を妻に迎えた。

23）1336年１月。

24）カールの弟のティロール伯ヨーハン・ハインリヒはこの時14歳で、その妻マルガレーテは18歳。

25）J. Pánek (ed.), A History of the Czech Lands, trans. by J. Quinn, P. Key, L. Bennis, Praha, 2009, p.91.

26）K. Bosl (Hrsg.), Handbuch der Geschichte der Böhmischen Länder, Bd.1, Stuttgart, 1967, S.336.

27）J. Pánek (ed.), op.cit., pp.99-100.

28）ibid., p.101.

29）ibid., p.103.

30）ibid.

31）K. Bosl (Hrsg.), op. cit., S.331-332.

32）J. Pánek (ed.), op. cit., pp.86-88. なお、プシェミスル家の国家体制をめぐる諸問題に関しては、進藤牧郎「ベーメンの封建制」堀米庸三編『西洋中世世界の展開』東京大学出版会、1973年、213-238頁、薩摩秀登『王権と貴族－中世チェコにみる中欧の国家』日本エディタースクール出版部、1991年を参照。

33）J. Pánek (ed.), ibid., pp.92-93.

34）Jörg K. Hoensch, Geschichte Böhmens, München, 1987, S.92.

35）ibid., S.93.

36）K. Bosl (Hrsg.), op. cit., S.275.

37）J. Pánek (ed.), op. cit., p.111.

38）ibid., p.113.

39）就位協定に関しては、薩摩秀登の前掲書を参照。

40）J. Pánek (ed.), op. cit., p.126.